

藤本夕衣著

『古典を失った大学：近代性の危機と教養の行方』

(NTT 出版, 2012年, 290頁)

福留 東土 (東京大学)

本書は大学における古典を巡る代表的論者の議論を手掛かりに、現代大学の病理を捉え直し、その行く末を考えようとする本格的思索に富んだ作品である。著者は、はじめに現代日本の大学改革の動向を瞥見しつつ、それを批判的観点から眺めている。だが、本書の特徴は、現代の動向をただ批判し、突き放すのではなく、現代大学を哲学的・歴史的観点から捉え直し、現代大学に対する認識枠組み自体を転換させる必要性を主張する点にある。今の大学のあり方に背を向け、古典や伝統的大学の素晴らしさを一方的に主張する回顧主義的立場に立つのではなく、広い見地に立って現代大学の置かれた状況を踏まえつつ、古典の重要性を批判的かつ分析豊かに捉え、それを通して大学のあり方を提言しようとしている。すなわち、著者は古典に立ち帰ることを通して大学の未来を志向しようとしているのである。

まず、著者は現代日本の大学を取り巻く認識の仕方に疑問を呈し、新たな認識の視点が必要であることを指摘する。これは、日本の大学・高等教育研究の現状に対する根本的な批判であると同時に、本書の議論の出発点を

構成することになる。とりわけ著者は、ユニバーサル化とグローバル化という現象論的なキーワードに基づいて語られるあり方自体を批判し、「ポストモダン」という知の変動、すなわち思想的・哲学的観点から現代大学に対する新たな捉え方を提示しようとする。著者は、「現行の大学改革にあつては、近代の大学の理念が力を失っている」にもかかわらず、「近代の大学の理念に取って代わるような新たな理念は提示されて」おらず、改革への批判も「個別のテーマの問題点を指摘するにとどまるとする。そうした現状に対して著者が依拠しようとするのが、哲学や政治哲学における諸議論である。

著者が議論のベースを形成する上で用いているのが J=F・リオタールの議論である。リオタールは近代大学を支えてきた知の形態として「科学」と「大きな物語」の二つを挙げる。科学は客観的な真理探究を通して近代大学の発展を促してきた。しかし、科学はそれ自身でその意義を正当化することはできず、科学を正当化するための「大きな物語」に支えられなければならない。それは、「科学が理性を導き人々を自由にするという、『解放の物語』と、科学の知的実践それ自体を正当化する『思弁の物語』の二つ」である。しかし、こうした前提自体に疑念が生じつつある状態が「ポストモダン」であり、その中にある大学の困難さである。そこでは大学や科学は、「より少ないインプットでどれだけ多くのアウトプットを引き出せるのか、という基準で判断される」、すなわち「遂行性」が重視されるようになる。そして、そうした状況変化以上に、そうした変化が自覚されていない現状にこそ、大学の危機があると警鐘を鳴らす。

こうした現状に対して著者は、大学における古典の重要性を主張した、しかし対立する立場から展開された A・ブルームと R・ローティの論をあえて並列的に取り上げ、それによってポストモダンにおける新たな「大学の物語」の展開を探ろうとする。

ブルームとローティは一般的にはそれぞれ右派、左派の論者とされるが、著者の取り上げ方はそうしたレッテルとは異なる視角から行われる。本書で取り上げられるブルームは西欧中心主義者でも復古主義者でもなく、ポストモダンの状況の中で、大学が社会との緊張関係を保ちつつ、「哲学の場」であり続けることを主張する大学教育論者である。とりわけ、学生らに対する慣習や規範の力が弱まり、価値中立を求める傾向の中で知的欲求を引き出すことが困難となる状況の中で、グレートブックスを読むことが、「時代を超えた問い」に触れ、それに対する「異なる応答」に気付きながら「哲学を愛する」

ことを可能とするのである。

一方、ローティは歴史相対主義の立場から、ポストモダンの状況では形而上哲学によって支えられてきたリベラリズムの根拠が失われているとする。そこにもはや普遍的価値は見出せない。しかし、リベラリズムに対するユートピア的希望を持ち続け、人々にインスピレーションを与えるために「偉大なる文芸作品」が必要なのであり、それに熱中できる場として「社会からの避難所」としての大学の存在が重視されるのである。

こうして著者は、立場の異なる論者がいずれも、大学という場、およびそこにおける古典の存在の重要性を指摘していることを主張する。しかし、本書は古典の重要性を確認するに終わるのではない。著者はさらに、これら論者の議論には、「古典を読むことに伴う危険性についての考察が欠けている」ことを指摘し、両者の異なる立場を相互に参照することを通じて、その危険性を乗り越える方法を提示しようとする。一方で無味乾燥な博識に陥ることなく、他方で古典を読者の枠組みを正当化する手段へと化さないためには、異なる観点からの古典の重要性の主張が必要なのである。ここでは古典を読むことの意義が冷静かつ複眼的に語られている。

現代大学の「改革」動向に抵抗感と違和感を抱く人は多いが、それにどのように対峙していけばよいのか、その姿勢を明確にすることは難しい。そうした状況に対して、本書は思索への光を与えてくれる内容を持っている。若手研究者による、従来の大学研究とは一線を画する新機軸の大学論の登場を喜びたい。評者の観点からみて本書の意義は3点にまとめられると思う。

ひとつには、哲学的思索を大学研究に持ち込んだ先駆的な業績であることである。本書は現代大学を取り巻く状況を課題意識の基底に置きつつ、しかしそこでしばしば問題とされる各論的分析に惑わされることなく、大局的な研究の視野を維持している。それによって、現代大学を俯瞰的に位置付けることに成功している。現在の大学・高等教育研究の現状に鑑みれば、こうした研究姿勢の維持は必ずしも容易ではないと想像される。また、方法論の観点からみても、これまでの大学研究に欠けていた新たな方法を提示しており、本書を契機として今後、大学を対象とする哲学的思索が広がっていくことを願いたい。

二点目としては、本書の中で取り上げられている論者の捉え方について、これまでの先行研究の動向を踏まえつつも通説にとらわれずに独自の位置付け方を提示していることである。それはすでに述べたブルーム、ロー

ティ、さらには二人の議論をつなぐ存在としてのL・シュトラウスの取り上げ方に象徴されている。幅広い文献渉猟を行う一方で、確かな視座からそれらに光を当てることの重要性、そしてそれによってもたらされる新たな解釈の可能性を示してくれている。

最後に、著者がとりわけローティに言及する際に使う「アイロニカル」な姿勢が本書にも貫かれていることを指摘したい。「アイロニカルな姿勢」とは、自らの主張や議論に何らかの限界があったとしても、それによって思索を止めてしまうのではなく、その限界を冷静に認識し、自らの立場を位置付け直しながら、前向きに議論を続けていく姿勢とも言えるものである。現代日本の大学を前提にしながら古典を語るという、一見無謀にも思える挑戦が十分な意義を持っていると感じられるのは、こうした研究姿勢を重ねてきた所産であろうと思われる。「社会からの避難所としての大学」を論じれば、すぐに象牙の塔との批判に晒されそうな現状にあっても、それを二元論的解釈に陥らせない深い考察から導き出している点がそれを象徴している。社会一般、とりわけ政治の場において正悪二元説をはじめとする表層的極論に取り巻かれている状況において、大学を巡る言説もすぎさま分かりやすい図式の中に押し込められてしまう。そうしたあり方とは別次元での議論を大学論として展開していくことが重要である。

大学のあり方を理念的・哲学的に捉えたいと願う人々にとって、本書は今後、必読の書となることだろう。著者のさらなる研究に大きな期待を抱くものである。